

せ た か む い

発行・古平町史編纂室
古平町文化会館 842-2590
第144号・平成13年9月1日

表で読む

古平の歴史

《51》

■発動機船の売買

カレイ漁は、川崎船で櫓(こ)を漕ぎ帆を立てて行われていましたが、昭和に入ると、電気チャッカーと呼ばれる小型の石油エンジンが多く使われるようになりました。その後、重油を燃料とした焼玉式エンジンが小型の漁船用として、急速に普及してきました。

次にあるのは、古平では比較的早く漁船の動力化を取り入れたことを示す売買証書です。

船舶売渡証書

第一 浜吉丸

一、防州型 三千馬力一艘

最新式高圧縮式発動機付き

総トン数 十八トン

外付属品一切

売渡価格金二千七百円

右船舶前記の価格にて貴殿へ売り渡し、この代金正に領収いたしました。売り渡した船舶について問題が起きたときには売り主において処置をし、いささかも貴殿に迷惑をかけるようなことはいたしません。もし売り主がその責任を果たせなかったときには保証人がこれを引き受け、一切の責任に应承担いますので、保証人と連署の上この証書をお渡しいたします。

大正十二年六月十八日

岩手県九戸郡待浜町

売主 浅水三郎 ㊤

古平郡古平町港町

保証人 小石勇吉 ㊤

古平郡古平町港町

保証人 伊藤健吉 ㊤

古平郡古平町港町

保証人 田中与三郎 ㊤

古平郡古平町大字沢江村

笹谷福蔵殿

■オヒョウの大物比べ

昭和三五年二月二四日、明栄丸

(港町・本間実さん所有)のカ

レイ刺網に、重さ一七〇キ、魚

体の長さが七尺六寸(二二三センチ)

とという巨大なオヒョウが掛かり、古平始まって以来の大物と大評判になりました。

古いのでは、明治二年二月の北水協会報告書に、「長さ八尺五寸(二六センチ)、肉厚一尺三四寸(四〇センチ)、目方三〇貫余りの(一一三キ)のオヒョウを釣った」と、ちよつと信じられないような記事が載っています。(先月号にも記載)

△この写真は撮影者・撮影年月などは不詳ですが、古平でのカレイ網漁の写真として大変めずらしいものです。おおよそ昭和40年前後かと考えております。



大正八年

8/21 今日**困**の建前で

大勢の人夫が出て来ている、百
余坪の家なのでずいぶん広い、
小樽の木工が来ていて最新式の
建築法だと言う、七時に終わり

モチまきをする、後、祝宴があ
り出席をする。

8/27 町ではあちこちで
普請していて景気が良い、**困**で

は大工十人、左官三人、壁つけ
の出面十人ほど、立派な家が出
来ることだろう。

9/1 起床早々に浜へ出

て見る、天塩から来たという木
材積みの船が二隻入港して陸揚
げしている、私の家でも買わね
ばならないので浜へ見に行く、
諸物価は戦後は下落の予想のと
ころ反対に上がる一方だ、白米
は一俵二十二円五十銭、これ
は大変だ

9/2 堀内から買った角

材百余石、水見大工と共に受け
取りに行く、上等な品だ、百石
で六百円、**困**では石屋、大工、
左官、出面と三十人余りが仕事
をしている。

9/4 建築の板類が入っ
たというので受け取る、四百円

余りだ、札幌から星野農学博士
が来てリング園を視察する、余
市からも何人かが来た、案内役
として方々を廻る。

9/5 大時化になり汽船
が三隻入港している、午後から
農園へ行きリング拾いをする、
モモも今年は見事な実をつけて
いる。

9/8 カムチャッカ帰り
する、丸山岬沖では大謀網の型

高野名幸作さんの日記から



【45】

の漁夫も乗った汽船が、六隻停
泊している、浜では、今春難破
した帆船安全丸の壊れた船体が
入札になり、それを買った人が
解体している、沢江の橋が落ち
かかっているというので応急修
理をしている。

9/11 古平ではまだ大謀
の建て込みをしていないが、近
年は周りの町村でも大謀熱が盛
んで、ずいぶん網やアバ縄が出

る。**困**の倉が出来、今日倉移し
をする
9/14 いよいよわが家の
切り込みに取りかかった、石倉
の方も人夫が七人、それに石屋
で取り壊しをする。
9/17 今日は日が良いの
か、あちこちで建前がある、**困**
も建前だ、石倉の取り壊しも終
わった。
9/25 快晴の浜辺を散歩
する、丸山岬沖では大謀網の型

入れをしている、沢山の土俵を
積んだ船が見える。
9/28 **困**では昨日限りで
小樽からの大工が引き上げた、
後は古平の大工二人でやってい
る、畳屋が店の畳をこしらえて
いる、三日までには移転できる
とのこと、**困**の仮宅を壊してそ
こへわが家の建築が始まる、道
路の整理によって、家を引いた
り、住宅を壊して新築の家へ移
る人もいる。
10/1 いよいよ十月だ、
五月の大火以来なにかと気ばか
り忙しくて、あつという間に五
か月が過ぎてしまった、焼けた
当時は、復旧はいつのことやら
と思っていたが、この物価高の
ときなのに、意外にも町の八分
通り住宅が建った、しかも以前
よりもみな立派な家ばかりだ。
10/8 浜へ出て見る、上
なぎだ、古平の大謀は去年は大
漁であったが、今年には沖出しと
か何とかでもめてばかりいて、
まだ投網出来ないでいる、沖村
の大謀だけが投網しているが、
あまり漁はないようだ、今日も
晴天だ、珍しく十日余りも天気
が続いている、今日は旧の十五
夜だ、倉の二階でお供えものを
する。
10/10 今日**困**支店の建
前の日だが、あいにくの小雨の
中、大勢の手伝いが来てやって
いる、**困**では今日新宅への引越
しをするので、その手伝いの人
も何人か来ている、ずいぶん広
い立派な家が出来た。

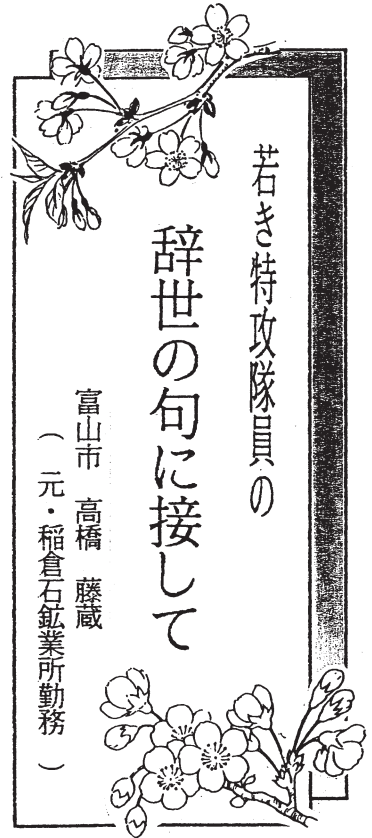
（以下次号）

若きと特攻隊員の

辞世の句に接して

富山市 高橋 藤蔵

(元・稲倉石鉱業所勤務)



ここ富山では、毎月の第一日曜日に「青空のみの市」が開かれ、会場となつている護国神社の境内には、各地から集まつた業者やフリーマーケットが所狭しと店を並べ、掘り出し物や割安ものを求めるお客で賑つています。

古美術や骨董とは無縁の私ですが、目の保養と、値段をたいて買い求めるお客と店主との掛け引きが面白く、毎回出かけしております。

今まで何十回となく通い続けていたのですが、昨年の秋に境内の片隅に「遺芳館」があることを初めて知り、何気なく立ち止まったのですが、誰かが私を招き、誰かから背中を押されたような気持ちにひかれ中に入つ

てみました。

建物の中には、白木の匂いが漂い、戦没者の遺品や写真が展示され、その多くは下級兵士のものでした。戦争を知る私は、当時の世相を偲びながら、食い入るように観ていたのですが、陸軍少年飛行学校を終えた十九才の特攻隊員が突撃の直前に謳つた辞世に心を打たれました。それは、当時の私とあまりにも似ていたからです。

すすんで少年滑空訓練所に入所し、グライダーによる飛行訓練を体験した後、海軍航空兵に合格し、軍需工場で働きながら召集の知らせを待っていた私の姿と、辞世の少年とが重なって見えたのです。

魂を奪い、思想を奪い、自由

を奪い、更に「命」までも奪う

など「聖戦」の美名のもとに軍国主義が謳歌され、教育と報道が国民への伝導を担い、国民を戦争一色に駆りたて、私も何の疑問もなく盲従したのです。

若しも戦争がもう少し続いていたら、私も辞世を残した十九才の青年と同じ運命を辿つたに違いありません。

「すべてお国の為」

と信じ、何のためらいもなく殉死した純な心と、この辞世を手にしたご両親の心情に思いを馳せた時、胸が締めつけられ、全身の血が引き、身震いと共に止めどなく涙が流れてきました。

まわりの方に気付かれぬように手を合わせ、嗚咽していた私に係の方がそっと寄ってきて

「お遺族の方ですか」

と尋ねられました。私は

「十九才の青年の辞世に合掌していました」

と言うと

「お遺族の方は、今も足しげくお参りされ、遺品に語りかけておられます。これからも遺霊をお慰めに来て下さい」

と、穏やかな眼差しで語つてく

れました。

拉叶世

特別攻撃隊員 十九才

昭和二十年五月十三日

父上様へ

海山に 劣らぬ親の厚恩に

今ぞ報へん 國の為散る

母上様へ

夢にだに 忘れぬ母の涙をば

いだきて三途の 橋を渡らむ

弟へ

國の為

散りにし兄をしのびては

頼むぞ後の 家のほまれを

各地には、戦没者を祀つた神社や石碑があります。

一点の疑心もなければ心の曇りもなく、只々純白な心で、たった一つの尊い「命」をも捧げてしまった多くの人々が、静かに眠っているのです。

あの頃を賛美するのは誤りです。賛美しないで下さい。

でも、拝まなくとも合掌しなぐともいいですから、今日の平和の陰に、こうした犠牲者がいたことを心の片隅に刻んでいて欲しいと思います。

——古平いるはづた——

【よ】

夜が更けて

信者で賑わう庚申さん

庚申碑(塚・塔)

琴平神社への参道を上って行く
くと右側に、『庚申』と書かれた
四基の石碑が建っています。
庚申碑と言っていますが、庚申
塚とか庚申塔などと呼ばれるこ
ともあります。

戦前のころまでは庚申(こうしん)と
んと親しみをこめて呼ばれ、信
心する人も多かった庚申信仰の
名残りです。

ここでいう庚申というのは、
十千・十二支の組み合わせ(まじり)
による日のことで、六十日に一
回まわってきますから、一年に
六回があり、今年の最後の庚申
の日は十二月二十三日で、たま
たま天皇誕生日と同じ日です。

庚申 信仰

《庚申さん》と言われるほど全
国的に人気のあった民間信仰
で、古平でも庚申講という仲間
の集まりがあつて大変盛んでし
た。庚申さんの日になると、そ

の仲間の人たち(講中(こうちゆう))

が碑に精進料理やお菓子などを
供え、その晩は当番(とうばん)
の家に集まって庚申さんをまつ
り、飲食をしながら賑やかに飲
談をしていました。

庚申さんってなあに?

もともとは中国で、「この世
での幸福と不老長寿」を願う信
仰に、仏教の教えなどが入り交
じって広がり、それが今から千
二百年ほど前に日本に渡って来
たものです。

この信仰によると、人の体内
に三尸(さんし)という三匹の虫が
いて、その人のどんな小さいあ
やまちも見逃さないように何時
も見張っている。庚申の日の夜
になると、その人の眠っている
間に体内から抜け出して天上に
昇り、天帝(宇宙のただひとつ
の神)に悪行を告げるとその人
の命が縮まるというのです。

そこで、当時の貴族たちは仲

間を集めて酒宴を開き、歌つた
り談笑をしたりして夜を明かし
たといいます。

日本では元旦の日の出を拝ん
だり、十五夜の月をまつつたり
して、日の出や月を拝む(日待
ひま、月待(つきまち))という信仰が
ありますが、庚申の日も眠ら
ないで三尸虫を見張り、夜明
けを待つということから庚申待
ともいわれています。

ことわざにも「話は庚申の晩
にせよ」とか、「庚申の晩には
らんだ子は盗人(ぬすこ)になる」
などというのがあります。

また、永い年月の間には庚申
信仰もだんだん変わってきて、
仏教を信仰している家では青面
金剛(しょうめんこんごう)病魔を除く鬼
神)の像や絵を、神道だと猿田
彦をまつり、それがいつの間
に「見ザル」「言わザル」「聞
かザル」の三匹の猿になったり
しました。

古平の庚申碑

古平には現在七基の庚申碑が
残っています。

琴平神社境内 四基
熊野神社境内 一基



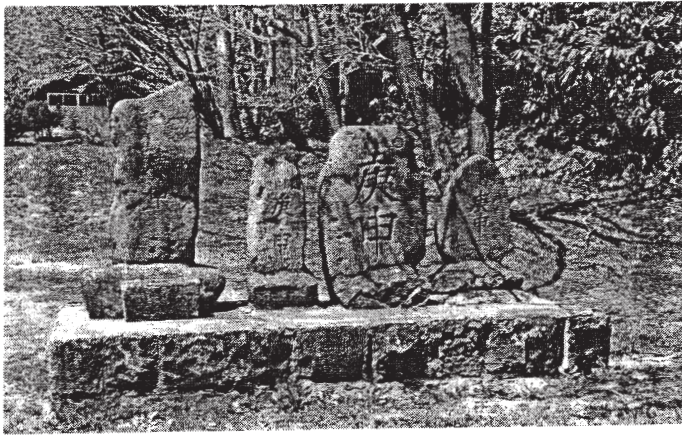
△熊野神社境内の庚申碑▽

沖町地藏堂脇 一基

墓地から高校への道路側一基
琴平神社境内の庚申碑には、
正月のドンド焼きの日に、昔か
らの信仰があつたことを知って
いる人が時にお参りして行くそ
うですが、熊野神社や沖町地藏
堂脇の庚申碑はお参りする人も
ないようです。墓地から高校へ
通じている道路側に元大山祇神
社(おたまきんじや)があり、そこに
あつた碑は笹やぶの中に埋もれ
てしまつて、今では知る人も少
ないようです。

琴平神社の庚申さん

入船町・大河原シナさんのお話では、古平でも庚申信仰が盛んであったところは、庚申碑に供物を供えてお参りしたあと当番の家に集まり、青面金剛の掛軸を飾ってお経を読み、精進料理を供えてお祭りをしていました。料理やお菓子を食べながら雑談し、午後十時ごろには終わって帰ったそうです。



その後、仲間も減ってきて集まる人も少なくなり、お祭りに使った青面金剛の掛軸を丸山青峯観音堂に収めました。ところが、生ものでもお供えする観音さんといつしよでは具合が悪いのでは、という人もおりました

が外に方法もなく、やはり青峯観音堂に納めることになり、今も観音さんと仲良く並んでいます。毎月十七日が観音さんのお参りの日で、元氣な信者のおばあちゃん方が六、七人でお世話をしています。

もう今では、改めて庚申さんをまつる行事は特にしていませんが、ときには、以前の庚申さんのお祭りのことなどが話題になるそうです。

沖町の庚申さん

大正の始めごろ沖町の宮沢清四郎さんが、子どもの体が弱かったこともあって、自分の出身地の新潟県で庚申信仰が盛んであったことから、自宅の近くに庚申碑を建てました。

沖町・宮沢タマさんのお話では、沖町でも戦前は庚申さんの行事が盛んで、お祭りにはのぼ

りを立てたりして賑やかだったそうです。その後は仲間の高齢化や漁の不振になったこともあって、いつの間にか庚申講も行われなくなっていました。

消えていく庚申さん

庚申信仰は「庚申待」といつて、集まった人たちがお経を読み、儀式の後は飲食をしながら歓談し、夜を明かすというのがそのお祭りでしたが、いろいろな民間信仰が交じり合い、「庚申待」という本来の信仰の意味はすっかりなくなっていました。

庚申さんには悪病を防ぐというご利益(ごちやく)もあることから、「庚申さんと地藏さんは村はずれ」といつて、村はずれの道端に建てられることが多く、こうして村に入って来る悪病神を追い払ってもらおうというわけです。

琴平神社境内にある一基はもと群来町の美国街道に、沖町のは余市山道の登り口近くにありました。

現在残っている七基の庚申碑は、以前盛んであった『庚申信

仰』の名残りなのです。

※ 豊浜町の沖町寄りの山の斜面に庚申碑が建っていますが、これは余市町の民俗文化財に指定されていて、町が通路の草刈りなどを行っています。最近までは豊浜町内の有志で庚申行事が行われていましたが、現在は行われていないようです。

先日、道内での庚申信仰について調査をしているある団体から照会がありました。現在では「庚申待」という行事を行っているところは全く無いそうです。千二百年来続いてきた、伝統的な「庚申信仰」という民俗行事もその姿を消してしまつたようです。

△ 高校への道路脇の庚申碑 ▽



断章小説「ふるさと遙か」 第26編

青春遺稿

吉川義雄

残雪のある街に住む山田の許に、東京の友から、桜が美しいと前書きのある便りが届いた。

若くして去った同郷の共通の友、皆川唯志の遺稿が出てきたから筆を入れて、出来れば曲をつけられるように整えてほしいというものだった。

遙かな遠い日、友の死に立ち合った二人だけに、歳月を重ねても思いは同じであった。

山田は、遺稿の心を損ねないように慎重に手を加えてみたが、全章が余りにも苦痛の聲に満ちているため、終章に彼の詩を加えて、自分の気持ちの救いとした。

それとも出船 北の漁港の
北の漁港の 夜が明ける

二、港とは悲しきものよ

この沈黙 春魚の
魚影去って 彼の心乗せた
漁船今頃は 北の漁港

北の漁港の どこで待つ

三、港とは怪しきものよ

月影に 千々にゆらいた
この胸の 波間漂う

思いを告げよ 北の漁港の
北の漁港の 更ける夜

(山田は堪え切れずに、自作の一章を書き加えた)

四、港とは優しきものよ

白々と 寄せる荒波
抱かれ船 越えた波路の

幾歳月を 北の漁港の

北の漁港
一、港とは寂しきものよ

春露の 切れ間に現える
舫い船 今日休漁か

北の漁港の 泊り船

稚拙な演歌の世界を書き終えても、山田はまだその余韻から抜け切れず、戦地から引きずってきた傷を癒すために入院した。湯の町の病院で作詞した自分の詩を書き添えた。

ふるさと

ふるさとは 樹々の繁みの
枝交す 空のすき間に
遥けくも 遠く見ゆるよ

この朝に 春は発つれど
ひかり差す 白きわが病窓
何とてか 憂愁ながきよ

ふるさとは 夢の彼方か
干潟なる 磯の外蟹の
つぶらなる 瞳にうつる

潮騒の 遠きあなたよ

同時代の若者が、何という類
似の歌詞を綴っていたものか。

それも、故郷を同じくした者
たちだから、その真意が余情の
さざ波となつて伝わってくる。

同郷の人たちが、山と書いて

も河と言つても、四季の風に裏打ちされた、胸をゆさぶる故郷の風景が迫つて来る。

詩を忘れた人生ほど、寂しいものはない。

詩心を失つた政治も、学問も何という索漠さか。明日かも知れぬ死を待つ人生に、金と肩書きに生命を削る人たちの何という怪しい姿よ。

苦澁の迫る青春のうめきの中でも、わが友、皆川唯志は夜明けの海を詠み、月影ゆらぐ港の波間にわが心情を託しているのだ。

季節を彩る宇宙の調べから、ほんの片言の言葉をいたたきながら、わが人生を綴り合わせて、そして飲びながらお返しする。

大宇宙は詩(人)に違いな
いと山田は思う。地球の下で奏でる人生も、光年を離れる群星も、生々死滅を繰り返して止まないようだ。その苦しみも、悲しみも、詩心さえあれば歓喜となつてその産声をあげるだろう。

△この稿終わり▽

北海道・樺太・千島を探険

最上徳内 蝦夷草紙

(13)

を読んでみましょう

対面の礼のこと

天明六年(一七八六)、私は先立ちとして蝦夷の島へ渡ることになり、アツケシ(厚岸)の乙名イコトイの舟に乗り、急いでエトロフ(択捉)島のシャルシヤムというところへ行つた。この島の乙名マウテは大変威勢があり、アイヌたちはみんな恐れ敬つていた。彼はイコトイの舅(しゅうと)であつたので、婿(むこ)を歓待しようと、濁り酒を造つてイコトイと久し振りの対面の礼があつた。

私も招かれて、上座のマウテカの左の席に座つた。婿のイコトイは下座に座つたが、二人ともものも言わずに座っている、家来のアイヌが一人進み出てあいさつを言う。歌のような音声であつたがこれをチャーラケという。普段の言葉とは違つていて、私には全く聞き取ることができなかった。

それから互いに進み寄ると牛の鬮(うま)のように額と額を合わせ、両手で相手の耳を押さえ、互いにも言わずに涙を流して身を振るわせている。私には何のことか分からずただ見ているだけだつた。

やがて泣き止むと元の座に戻り、礼をしながらチャーラケとをやるのかと後に尋ねたところ、これは親類が久しぶりの対面の礼であるという。それが終わると酒宴が始まり、アイヌが大勢集まり、それに赤人が三

人、私を加えて、日本・蝦夷・ロシアの三国の者が集まり、座も打ち解けてくると、アイヌはアイヌの言葉で歌い、アイヌの踊りをし、また赤人は赤人の言葉で赤人の踊りをし、私は日本の馬子歌を歌つた。互いに遠慮なく座興を楽しんだが、別れた後、再びこのようなことはないだろうと思つたと懐かしさもひとしおであつた。

酒宴と酒器のこと

アイヌの人たちは酒宴ではとても礼儀に厚く、粗略な扱いをすることがない。宴が盛んになると騒々しくなるが、これも親しみの礼であり、賑やかに歌い舞うが、器物の多いのも自慢のようである。本州で使われている耳盥(みみすす)みだら(耳盥みだら)Ⅱ両側に耳のような取っ手がついている、湯おけ、ひしやく、さかずき台など、金・銀の飾りのついたものを喜び、それらをみな酒器として使つてゐる。

ここに松前の通辞(通訳)で長右衛門という者がいたが、一つ

のおもしろい話をしていた。シラヌカ(白糖)という所に入ったときのこと、その乙名が「近頃、珍しい器物が入つて来ないが、何か良い物がないか」と言うので、そのことを松前のある商人に伝えたところ、早速金めっきの金具のついた挟箱(はさみばこ)Ⅱ武士が外出のとき必要用品を入れ、従者に担がせる「酒器として使つていたといふみみだら」





古平ホトトギス会

梵妻の涼しき声に迎へられ	予定事なさざる内に秋立ちぬ	子等泳ぎ浮き輪に手足はえにけり	表札の文字も薄れし蔦茂る	風通ふ白樺林雪笑窪	盂蘭盆の供物の瓜の匂へけり	汐風も日中の風も秋めけり	床の間の滝の一ト文字涼しかり	遠花火ぶつかり合へし音を観る	ミニトマト夏日燦燦熟れにけり	リラの香の扉この道はいつか来し	棟上を祝し積丹天高し	墓へゆく四季の早さや芒経
斉藤波留	山口悦子	越野敏雄	大和田絵伊	福井幸平	関口勝志	よしざきり	仲谷比呂古	越野清治	室谷弘子	中村樺宵	岩瀬みのる	泉清三

棒のついた箱で、中に金紙を張ったものをシラヌカに送って来た。これを見た乙名は大いに気に入る、乾物類や毛皮などとそれを交換した。

乙名は、これまでに見たことのない立派な器物を手に入れたと大いに喜び、濁り酒を造り、知り合いのアイヌたちを集めて酒宴を開いた。そのときに彼は自慢の挟箱を持ち出し、それに酒を注いでみなの前に出して見せたら、来客のアイヌたち

は見事な器物であると大いに褒め称えた。ところが酒を入れたために、中の金紙が全部はがれてしまったのである。

これを見た乙名は、莫大な品物と交換したのに、このようないかがわしい物で我らをたぶらかしたと立腹した。長右衛門もこれには困ったと、その者は私にいろいろと話してくれた。蝦夷では器物は酒宴にだけ使い、日常使うことはない。これもひとつの生活習慣である。

編集雑記

▽新聞などは大分前から「読みやすい紙面」ということで、文字を大きくして読者にも大変好評のようです。こちらでも少し文字を大きくしましたが、お気付きでしょうか。俳句は今までのものより一段上の大きさで、本文のはその中間ぐらいです。▽紙の方も再生紙を使っていますのでちよつと白さが落ちますが、役場も資源のリサイクルに取り組んでいます。

▽今年もまた「たらつり節全国大会」が近づいてきました。出場者も三歳から八八歳までの一八〇人を超える盛況ぶりです。一般・熟年・子どもの部となっています。古平町からは本間初枝さん・本間フミさん・中村紀久江さんの三人が出場されます。来聴されご声援のほどを――。▽久々に明るい話題。連続二回失敗していたH2Aロケットが見事打ち上げに成功。技術天国日本の成果が示されました。